

たまのよこやま

(財)東京都埋蔵文化財センター報 No.11 昭和62年10月1日

特集

遺跡庭園「縄文の村」



遺跡庭園の入口から敷石住居を望む

「縄文の村」づくり

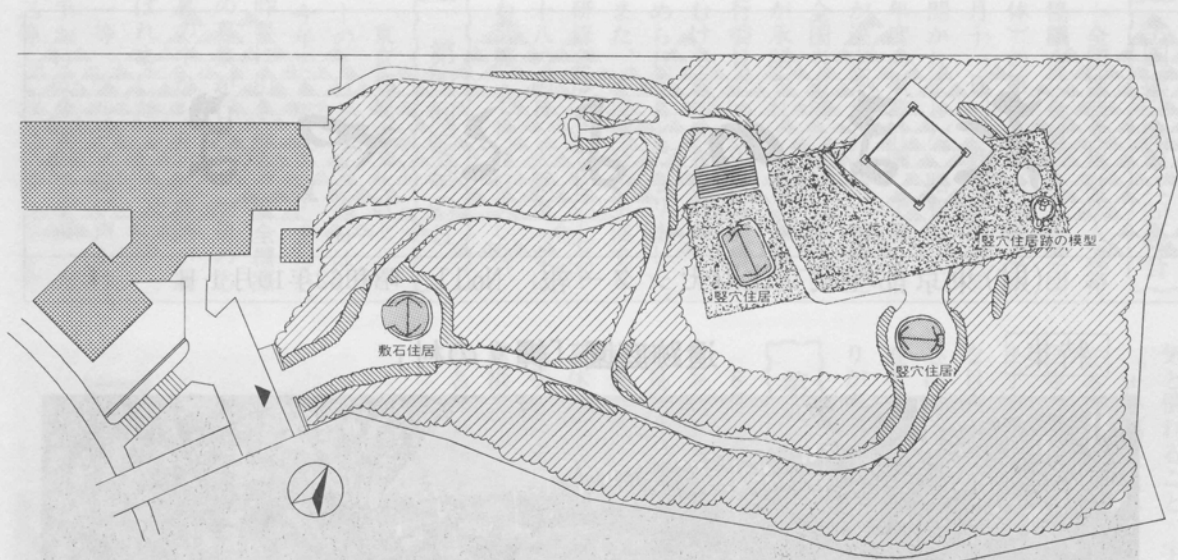
多摩ニュータウン遺跡群の中でも特に重要な遺跡として、かねてより保存要望されていた遺跡の一つ、No.57遺跡が今年の四月から遺跡庭園「縄文の村」として整備され、公開されている。

保存要望書が提出されてからかれこれ二十年、紆余曲折はあったが、昭和五十七年にこの遺跡の一角に都立の埋蔵文化財調査普及施設の建設が決まったのを契機に、この整備が実現したものである。

ところで、遺跡の保存には、現状を損なうことなく、あるがままの状態で後世に伝えるのが最良の方法であるとする立場と、手を加えて一般に利用できるように整備すべきだとする立場とがある。前者を理想論とすると後者は現実論である。

No.57遺跡の保存については、すでにセンター用地として購入する段階で、屋内の展示ホールと一体の展示スペースとして整備していくという方針の決定がなされていた。遺物のみならず遺跡をも積極的に活用していくというのである。かくして縄文時代の集落遺跡、No.57遺跡は遺跡庭園「縄文の村」として現代に蘇ったが、これも土地の高度利用が求められている都市型の遺跡保存の一つの姿と見えようか。

(可児)



「縄文の村」の平面図

「縄文の村」の概要

センターの東隣にある遺跡庭園「縄文の村」は、多摩ニュータウンNo.57遺跡を保存する目的で庭園風に整備されたものです。現在は工事によって周囲の景観が大きく変わっていますが、以前は北側を流れる乞田川に向かって台地が舌状に張りだしていました。遺跡面積は約一万㎡で、そのうち約九千㎡が残っています。

これまでに鉄塔と鉄道、それにセンターの建物などの工事に伴って前後三回の調査が行われていますが、これらの調査によって、縄文時代前期・中期の竪穴住居跡をはじめとして、旧石器時代から中・近世にいたるまでの遺構・遺物が多数発見されています。遺跡の大部分はまだ未調査のままの状態で保存されていますが、この遺跡の主体が縄文時代の集落跡であったことから、「縄文の村」と名付けて整備されたものです。

遺跡の整備は、この遺跡の一角に都立の埋蔵文化財調査普及施設の建設が決まり、その用地として東京都教育委員会が購入したのを契機に具体化しました。この整備はあくまでもNo.57遺跡の保存を目的としたものであるため、地下の遺構を壊すことのないよう全体に土盛がしてあります。そして、この遺跡の主体である縄文時代の集落景観を現代に再現するために、植栽や遺構の復原などにいろいろと工夫が凝らされています。

復原住居

この遺跡からは、これまでの調査によって、縄文時代の竪穴住居跡が7基発見されています。遺跡の大部分が未調査のまま保存されているため、全貌は不明ですが、前期の住居跡2基、中期の住居跡5基が発見されていることから、この地が縄文前期・中期の集落跡であったことが明らかになっています。このたびの整



同右、整備後の遠景（昭和62年）

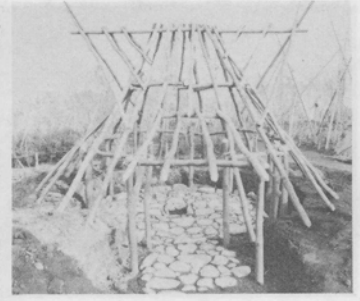


No.57遺跡の遠景（昭和45年）

備では、それぞれの時期の代表的な住居が、当時使われていたと考えられる材料を用いて復原されています。まず、入口を入って正面



敷石住居



敷石住居の屋根組み

にみえるのが、中期終末の敷石住居です。関東地方を中心に、中部地方から東北地方の南部にかけて、竪穴住居の床に石を敷くこのよ

うな住居様式が広く流行しました。多摩ニュータウン地域でも敷石住居跡の発見例は多く、この遺跡からも3基発見されています。ここに復原されている敷石住居は、八王子市堀之内のNo.796遺跡で発見された敷石を移築したものです。ところで、これまで敷石住居は、石を敷くという特殊な形態であったため、住居というよりは祭りのための施設であろうという解釈が主流を占めていました。ところが、多摩ニュータウン地域の調査で、この解釈は変更を余儀なくされてきています。この地域では、発見される中期終末期の住居跡がすべて敷石住居であったからです。敷石住居は、少なくとも、この地域では当時の一般的な住居であったようです。

上でどのようにして生活していたのか、敷石住居の中で当時の生活ぶりを想像してみてください。次いで、敷石住居の後方遺跡庭園の中ほどにみえるのが前期末葉の竪穴住居です。昭和四十六年の調査で

発見された7号住居跡が、ほぼ調査当時の位置に復原されています。平面のかたちは、この時期に特有なやや台形にちかい長方形で、床面積が約30㎡あります。一緒に調査された同時期の1号住居跡(約5.5㎡)や中



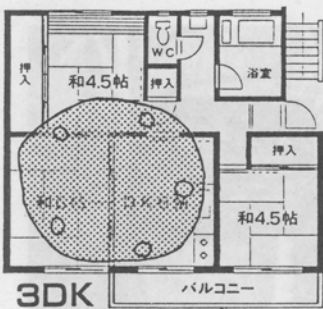
前期の竪穴住居

期の住居跡と比べてその大きさが目に付きます。中に炉が2カ所あることから、この住居には2家族がすんでいた可能性もあります。屋根の構造については、どの住居についてもよくわかっていませんが、この復原住居には棟に草が植えてあります。これは芝棟とも草棟ともいい、草の根を張らせて棟を固める方法として古くから行われてきた方法といわれています。縄文時代にまで遡るかどうかはわかりませんが、群馬県の古墳時代の遺跡では、屋根の上にまで土を乗せた住居跡のあることが知られていますので、少なくともこの時代にはまだ遡る可能性があります。今はみることも

少なくなくなった草屋根の上にも先人達のこのような工夫の跡が残されていたのです。最後に、一番奥にみえるのが中期末葉の、敷石住居よりも少し古い時期の住居です。床にはまだ石が敷かれていません。昭和四十五

年の調査で鉄塔の東側から発見された5号住居跡をモデルにして、この場所に復原されたものです。平面のかたちはやや楕円形で、壁の内側にある5本の柱で屋根を支えられています。縄文時代中期にみられる標準的な大きさの住居ですが、左の図をみて現在の団地の

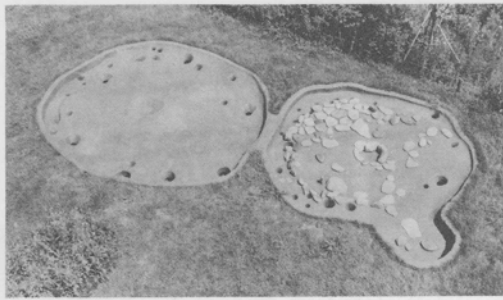
3DK



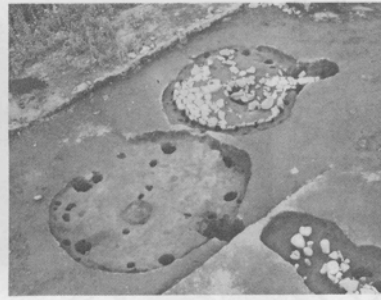
住居の大きさの比較(網目は竪穴住居)



中期の竪穴住居



竪穴住居跡の模型



発掘調査当時の住居跡

間取りと比較してみてください。住居の中での暮らしや人数についてはまだ比較できませんが、当時の住居は、おおよそ現在の団地の2部屋分の広さに相当するようです。

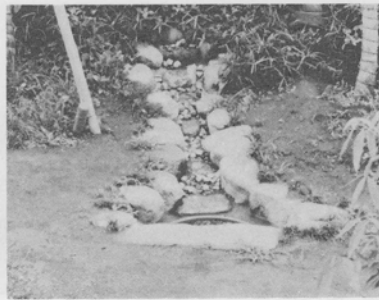
竪穴住居の模型

遺跡庭園の北東にみえる鉄塔の東側には、竪穴住居の跡が模型で展示してあります。昭和四十五年の発掘調査で見えられた縄文時代中期の4号・5号住居跡の上に盛土をして、そこに実物を模した模型を置いたものです。見学者にとっては発掘されたままの状態を見学できる実物の露出展示が最も望ましい方法ではありませんが、現在の保存技術では薬品などを使って土に化学処理を施しても、風雨による風化を防ぐことはきわめて難しいそうです。実物は埋め戻して保存してありますので、新しい方法が開発されるまでの間は、当分模型で辛抱していただくほかはなさそうです。

湧き水

遺跡庭園の北斜面にある小さな谷に、湧き水を溜める水場がつくられています。現在は水脈が切れて湧き水は

みられませんが、鉄道などの工事が始まるまでは、ここに豊富な湧き水を溜める井戸があり、近所にあった農家の飲料水や農業用水として使われていました。どんな日照りのときでも水溜することはなかったそうです。この湧き水の利用がいつの時代にまで遡るかはわ



湧き水

遺跡庭園には、縄文の村にあわせて当時の景観を復原するために、この地域に繁茂していたと考えられる樹木が約五十種類植えられています。現在の丘陵地の植生は、薪炭林などとしての利用のために人の手が頻繁に入っており、縄文時代とはかなり異なっていると考えられますので、植栽計画にあたっては、八王子市堀之内のNo.796遺跡の旧大栗川河床から発見された、縄文時代中期の泥炭層の資料が参考にされています。この泥炭層の資料によると、当時この地域には温帯落葉広葉樹を中心に、暖温帯落葉広葉樹、暖温帯常緑広葉樹、針葉樹を交えた豊かな森林があったと推定されています。

樹木の植栽

庭園内に植えられた約五十種類の樹木は、当時この地域に沢山生えていて、しかも縄文人が食料や道具として利用したと思われるものが選ばれています。樹木のほかに草も植えられています。これについては当時の様子がよくわかっています。山菜などとして今日でも利用されている食用植物が植えられています。まだ種類も少ないので、植栽は今後の課題です。



樹木の名前札

以上が遺跡庭園「縄文の村」のあらましですが、みなさんも実際に入園して縄文人の生活を味わってください。

(可児)

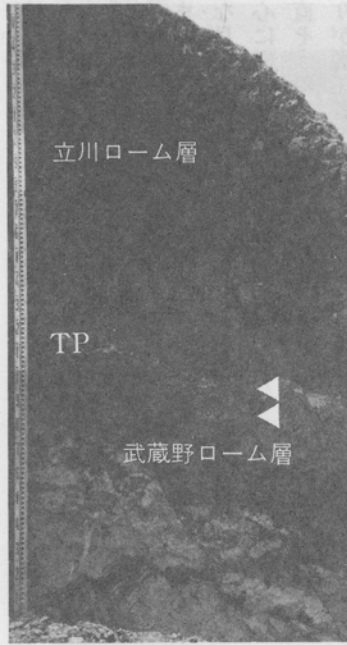


No.471-B 遺跡 近景

今回は稲城市坂浜で発見され、五月二十八日から発掘調査の行われた旧石器遺跡とその時代を紹介します。遺跡は多摩ニュータウンの東はずれ近くで、多摩カントリークラブの南側に接した場所にあたります。石器の発見されたのは標高約130mで、多摩市船ヶ台から東に向って続く丘陵の先端に位置します。遺跡の南側約500mには多摩川の支流である三沢川が東に向って流れ、さらに遺跡の東・西側は多摩丘陵特有の傾斜の強い斜面となっています。最初に石器が発見された

のはやせ尾根の東側断面で地表からの深さは約2.5m、武蔵野ローム層を証明する東京軽石層(TP)の直上から5点発見されました。そこで、発掘は石器の発見された場所を中心に掘り下げるべく平面的に掘り下げの方法をとり、石器の分布を追いかけました。

その結果、石器が5点発見され、約12㎡に合計10点となりました。石器の分布範囲はさらに東側に広がっていたのではなからうかと思われませんが、すでに削られていたため、その全貌ははっきりしません。発見された石器は砂岩の叩き石1点の他は全て流紋岩製で、尖頭器1点、くさ



立川ロームと武蔵野ローム

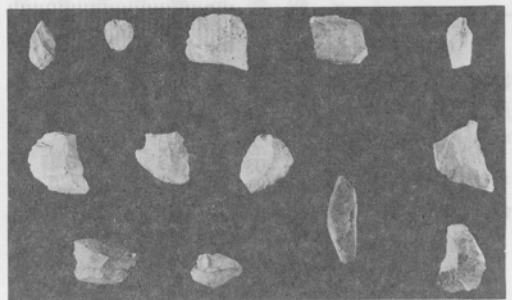
び形石器1点、スクレイパー1点、石核1点、剥片5点で、黒曜石・安山岩や珪岩は1点も含まれていない特徴も示しています。従来、多摩丘陵や武蔵野

台地、相模野台地の赤土の中から発見される最下層の石器群には、ナイフ形石器、局部磨製石斧、ドリルなどが含まれており、その時代の特徴を示す内容と大きく異なっているため、従来発見され続けている3万年代の石器文化と異質であることが考えられました。また、石焼調理の跡と考えられている礫群も発見されないばかりか、炭つぶや石器製作のときに生じるこまかな石屑も発見されないため、生

活行動様式のちがいをも考えなければなりません。これらの諸特徴を列挙するまでもなく、石器の年代を良く示すのはそれを含んでいる火山灰で、それが4万9千年±5千年前に降下した東京軽石層の直上に位置することが、これら発掘された石器群の年代を示す訳です。

さて、発掘が進むに従って、さらに東京軽石層の下から3点の石器が発見されました。凝灰岩製のヘラ形石器1点と剥片1点、それに乳白色をしたメノウの剥片1点と数は少ないのですが、5万年を上まわる年代の石器文化の存在が確認された訳です。

上層文化の中から発見された尖頭器は、恐らく槍の穂先に使われていたと思われませんが、縁の加工は剥片の中央まで及ばない粗雑なもので、似かよった石器は宮城県座散乱木遺跡13層上面や馬場壇A遺跡7・10層から発見されています。



出土した石器

この様に石器の型的な特徴や火山灰の年代測定結果をもとにすると、約4〜5万年以前にはこの多摩丘陵と宮城県周辺には似かよった石器文化が存在したことになるのです。

これらの石器文化が残された当時は氷河時代の寒い時期に相当し、気温も今より7〜8度は低く、今の日本海は湖であったため、陸つづきである日本は大陸的な気候で、ナウマン象、オオツノシカ等が渡ってきました。

全国埋文協第八回総会

全国埋蔵文化財法人連絡

協議会(会員法人三十三団体)の第八回総会が去る六月十一日、長野県諏訪市で開かれました。昭和六十二年度の事業計画、予算などが決定されたほか、懸案の全国考古展(仮称)の開催が承認され、今後「企画実行委員会」により、実施にむけて具体的な検討がすすめられることになりました。また、本協議会の主催する研修会は、去る九月十七(木)十八の両日、大阪市(なにわ会館)で行われました。

第四回安全の日

東京都埋蔵文化財センター

の7月1日安全の日は、今年で4年目を迎えました。昨年に引き続き、安全標語の募集が行われ、390句の応募の中から6句の標語が選ばれました。

一等「ベルコン運び声かけ手かけ安全運搬」小葉一夫二等「こわいのはいつも平

気と慣れること」宇井良和

「古代の丘に今日も笑顔で

安全作業」深沢喜典

三等「安全と口で言うより

まず実行」大塚里子、「小さ

な目大きな目みんなで安全

心にゆとり」宮本幸子、「見

直そう職場の安全一人ひと

りが責任者」北原佳奈

第八回遺跡見学会

8月29日、多摩ニュータ

ウンNo.471遺跡において、遺

跡見学会が開かれました。

残暑の厳しい日でしたが、

夏休み中の小学生を連れた

親子も目立ち、遠くは山梨、

横浜方面の方々を含め、約

400名の参加がありました。

センター製作映画
コンクールに見事入賞!!

映画「丘陵の中の歴史」

が第25回日本産業映画・ビ

デオコンクール、産業映画・

ビデオ奨励賞に輝き、去る

7月2日受賞式が行われま

した。また、それに引き続

き、昨年度製作されました

「古代史の発掘」が教育映

画コンクール優秀作品賞に

選ばれました。

トピックス

東京都埋蔵文化財センタ

ーでは、昭和63年1月10日

(日)「多摩ニュータウン遺跡

群を考えるシンポジウム」

を「パルテノン多摩」で開

催する予定です。

六月九日 昭和62年度職

員研究助成、海外研修が次

のとおり決定しました。

○職員研究助成 「台形様

石器群の系統と展開」佐

藤宏之、「古代多摩ニュー

タウン遺跡群の動向とその

評価」鶴間正昭、「集落

松崎元樹、「古代窯跡出土

の燃料材木からみた自然環

境について」山口慶一、

千野裕道、渡辺克彦

○海外研修 小葉一夫、尾

垣勝彦、福嶋宗人

また文部省科学研究費奨

励研究Bは、飯塚武司、比

田井民子に決定しました。

六月十三日 石井調査研

究部長は、東京都よりの派

遣で、六月二十八日まで、

欧州での海外研修を行いま

した。

九月二日 調査研究部、

佐藤宏之さんは、現場付近

の火災の初期消火活動によ

り表彰されました。

最近の入館者

4月1日の遺跡庭園の一

般公開に伴い、センターの

来館者は、一般の方々が目

立ち4月・5月にわたり、

約5千人近い数で昨年のご

これらの月の2倍になります。



当センター副理事長西片

久さんが5月22日付で辞任

され、後任には、東京都教育

庁次長高田健三さんが就任

されました。また、都立セ

ンター所長徳永允昭さんが3

月31日付で退職、後任に菊

池勲さんが着任されました。

本号では、去る四月に開

園した遺跡庭園「縄文の村」

を特集としましたが、

き 六月「南関東ローム

が 層で前期旧石器発見

ととして、注目を集め

あ たNo.471-B遺跡の調

査速報も掲載しまし

た。館内の展示ケースに石

器は並べられています。

発行

財団法人 東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市
落合1-14-2
☎ 0423-73-5296
0423-74-8044
昭和62年10月1日